

二〇二二年度

恵泉女学園中学校 第二回 入学試験問題

国語 (四五分) (全一七ページ)

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏名

一、小学五年生の灰原慎たちは、理科の授業で全員が金魚の飼育をしています。夏休み中は各自が飼育箱を持ち帰り自宅で育てますが、終業式の日には四匹ひきいた慎の金魚は、懸命けんめいの世話にもかかわらず次々に死んでしまいます。慎はこれまでも世話をした生き物や植物を長生きさせることができず、自分は「死神の指」の持ち主だと感じてきました。そんな慎に追い打ちをかけるように、夏休みの終わりにまた一匹が死んでしまったのです。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

穴の底にレモン色(注)に染まった金魚を寝かせ、土をかぶせる。休み明けの共同墓地には雑草が生いしげおっている。たったいまほりかえした場所だけが、目印のように黒くなっていた。

まただめだったのに、思ったほどくやしくはなかった。

「前向き」っていうより、もはやあきらめに近い、しずかな気持ちでいる。努力のかいなく生き物が死んでいくことに、すっかり慣れてしまったのかもしれない。

残っているのは、バケツのチビ金魚、ただ一匹だけだ。

夕方、チビ金魚の入った飼育箱をかかえて、うちを出た。チビ金魚はあいかわらずエサを食べずにじっとしている。

(注) レモン色：金魚用の薬の色。

「慎くーん！」

マンションのエントランスを出ると、<sup>(注)</sup>タビとサミルが息を切らして走ってきた。

「おいて帰るなよ。これからどっか行くわけ？」

タビは飼育箱をのぞきこむ。

<sup>(注)</sup>「すどうさんとこ。こいつ、具合悪いんだ。ちょっと見てもらおうと思って」

「ふうん。病気なのかな。それ、重そうだから交代で持っていこう」

ふたりも当然のごとくついてくる気にいる。

「いいけど、そつと持てよ。ゆらすと金魚が酔<sup>よ</sup>うから」

おれはしぶしぶ言った。できればひとりでこっそり行きたかったのだが、しかたがない。

飼育箱をゆらさないように運ぶのは思っていたより大変で、金魚畑までの道のりは、いつもよりずっと遠く感じた。三人交代でなんとか金魚を養魚場まで運ぶと、店のなかからきき覚えのある声があった。

「あ、いらっしやい！」

入っていくと、女子三人組が来ていた。花音と綾と遠藤さんが、レジにいる<sup>(注)</sup>まるちゃんをかこんでしゃべっている。もう、どうに

(注) タビとサミル：慎の同級生。

すどうさん：養魚場の店主。

まるちゃん：すどうさんの妻。

でもなれってかんじだ。

まるちゃんは、いすにすわっていた。すどうさんといっしょに屋外で作業していることが多かったはずなのに、ほとんど日に焼けていない。あいかわらずマリィ・ローランサンの絵の女の人みたいに白くてふんわりしている。

「ねえねえ。まるちゃんね、赤ちゃんがいるんだって」

花音が、ないしょ話でもするみたいな声で言った。

「来年のはじめごろには産まれるんだって」

まるちゃんは、ゆったりしたワンピースを着ている。ぱっと見ただけじゃわからなかったけど、よく見るとすこしおなかのあたりがふくらんでいるような気もする。

「さつきね、おなか、さわらせてもらったの。さわると赤ちゃんがいるってわかるよ」

「よかったら、さわってみる？」

まるちゃんは、にっこりして立ちあがった。

「えっ、おれら？ いやいや、いいよ。な？」

タビは首をふっておれとサミルのほうを交互に見る。

でもサミルは手をのばすと、まるちゃんのおなかにそっと置いた。

「あ。いま、なにかぴくっとした」

「それ、赤ちゃんよ。なかで動いてるの」

まるちゃんが言う。

(1) おれはズボンのポケットのなかで手をにぎりしめ、後ずさりした。

「灰原くんもさわってみなよ」

後ずさるおれに、綾は言った。遠藤さんが心配そうな顔で見ている。

「男子、恥はずかしがってる」

花音と綾は顔を見あわせて、くくくと笑った。

「るせーな」

タビは顔を赤らめて言い返す。

「産まれたらだっこさせて！」

「楽しみだねえ」

わいわいにぎやかにまるちゃんをかこんでいるみんなを残して、おれは外に出た。

金魚ぐうぜんが死んだのは、偶然。

頭ではちゃんとわかってる。だけど、「死神の指」のせいで赤ちゃんにもしものことがあったら……。おれはきつと永久に、偶然だなんて思えなくなってしまいそうだ。

夏のおわりの庭は、水と緑と生き物にあふれていた。

(2) やっぱりここはいいな。

華やかな金魚たちに目をうばわれがちだけど、この庭には植物も多い。金魚たちの泳ぐ容器に交じって、大小の鉢植えの庭木がならんでいる。

敷地をかこむように造りつけられた木の柵にはヘチマがつるをはわせ、あちこちに青い実がぶらさがっている。雑然としているけれど荒れているわけではないところが、タビの家の庭と似ていた。ここの人たちは、「緑の指」と「水色の指」、どちらもあわせ持っているようだ。

目の前の水槽でも、たくさん金魚たちが泳ぎまわっている。水槽にはりつけられた札によると、「丹頂」という種類らしい。からだはまっ白で、頭の上だけが帽子をのせたように赤くふくらんでいる。丹頂鶴みたいな柄の金魚が、群れで泳いでいる様子は迫力がある。おなじ水槽で何十匹も飼われているにもかかわらず、どれも元気そう……と思いきや、いた。

群れのなかに一匹、泳ぎ方のおかしなのがいる。水面近くでもがきながら、必死にからだをたて直そうとしている。なんとか起きあがっても、またすぐにコロンとひっくり返ってしまう。おなかを上にして逆さになった金魚は苦しそうだ。

(注)「緑の指」と「水色の指」：植物・魚を上手に育てる能力。

「そいつ、てんぷく 転覆病なんだ」

うしろから声がした。ふり返ると、すどうさんがかけろうのようにゆれていた。

「転覆病？」

「うん。一度転覆すると、元にもどんないことが多いんだよね」

「じゃああいつ、もうすぐ死ぬわけ？」

「いや、すぐには死なないと思うよ。しばらくしたら死んでしまう場合もあるけど、けっこう長生きするやつもいるし、かたむいた

り逆さになったままてんじゅ 天寿を I やつもいる」

「治してやる方法はないの？」

「うーん。エサを減らしたり水温を変えてみたり、いろいろ工夫くふうはしてるんだけどねえ」

すどうさんは II 悪く答える。

一生あのままにいるかもしれないなんて、すごいストレスだろう。金魚はもちろんつらいだろうし、それを見ている人間もつらそうだ。

「ひょっとして、この金魚も不治の病なのかな？」

おれは連れてきたチビ金魚を見せた。

「半月くらい前からずっとこんなかんじ。なかなか大きくならないし、エサも食べないし、ただ浮かんでじっとしてて……」

早いうちにバケツに隔離かくりしたおかげか、こいつだけはあの泡あわつぶ病かんせんに感染せずすんだ。けれど、からだにあやしい斑点はんてんや寄生虫

らしきものも見あたらないのに元気がない。これ以上、どうしてやればいいのかわからない。

「ふうん。うーむ」

すどうさんは、あらゆる角度から弱った金魚を観察して、うなっている。

「うーん、ちょっと……よくわかんないねえ」

「原因不明……?」

プロにすらあつさりさじを投げられ、おれは A。

「うん。ときどき、こういうふうになるのっているよ。まあしょうがないね」

すどうさんは庭の金魚たちを見わたしながら言った。

「しょうがない、ですか」

自分が育てる生き物がバタバタ死んでいっても、そうやって受け入れるしかないのだろうか……と思いかけたとき。「あ」と、お

れは思わず声をあげた。

「どうかした?」



「その金魚、死んでます」

足元のト口舟ぶねの水面に、黒出目金が一匹、浮かんでいる。

「ああ、ほんとだ」

すどうさんはさしておどろいた様子もなく答えた。そして死んだ金魚を網あみですくって、そばの鉢植えにひよいとほうりこんだ。

意表をつく動作に、B。

「肥料、肥料」

すどうさんは上から軽く土をまぶしながら言った。

「……死んだら、いつもそうしてるんですか？」

「ああ、いや。もっと大きいのか、数が多いときは生ごみに出すけど」

「やっぱり、ここの金魚も、死んだりするんだ」

「あたりまえだよ。生き物なんだから」と、すどうさんは笑った。

あたりまえのことかもしれないけど、すこしC。

「おれの飼ってる金魚、とにかくよく死ぬんです。最初は大事に飼おうと思ってたはずなのに、死んでいくたびに、ああまただっって、うんざりしてきて。それに、色やかたちもなんか変だし。生き残ってるこいつも、ぜんぜん大きくならなくて……」

「あそこで、間引いてるんだ」

すどうさんはふいに、店のとなりに建つ小屋を指さした。春に、「企業秘密だから入っちゃダメ」って言ってた小屋だ。

「間引く……?」

きいたことのない言葉。でも、なんだか不穏な響きだ。

「それぞれの品種の持つ色やかたちがよく出ているかどうかで、稚魚ちぎよを選別してるんだ。稚魚から成魚に成長するまでのあいだに、うちでは四回か五回やってる。からだやひれのかたちや、色のいいものはつづけて育てるけど、残念ながらそうじゃないやつは

……」

<sup>(3)</sup> すどうさんは言葉を切った。

もしかして、あそこで……殺してるのか？

売り物の金魚たちがならんでいるそばで、まさかそんなことが行われていたなんて。

「なるべくそうしないですむように、考えてはいるんだけどね。『ハネ金』として安く売ったり、金魚すくい業者や熱帯魚ショップに買いつつもらったり……」

なんで金魚を熱帯魚ショップに売るのが？ ときく前に、すどうさんが答えた。

「稚魚は熱帯魚のエサになるから」

飼育箱のなかを泳ぎまわっていたかわいい稚魚たちを思いだす。

小さな生物がより大きな生物のエサになるのは自然なことなんだって、わかってはいるけど。ショックだった。

「店で売られている金魚は、卵からふ化したうちのほんのひとにぎり、選びぬかれたものなんだ。いまいるたくさんさんの種類の金魚は、人が一生懸命手を加えて長い時間をかけて、それぞれの色やかたちに変化させていったものだから、ちよつと油断するとすぐに先祖のフナみたいな姿にもどろうとする。だから、卵から育ててくれた和金が、いわゆる『きれいな和金』みたいに育たなくなつて、ちよつともおかしくないよ」

「おれがおかしいのかと思つてた」

「死神の指」を持つてる、おれが……。

「いや。むしろこんなに大事に飼つてくれて、ありがたい」

淡々<sup>たんたん</sup>と語るこの人と似た顔を、おれは見たことがあつた。

<sup>(注)</sup>  
母さんの顔。

母さんは病院で。すどうさんはこの場所で。きっと、ひと一倍多くの死に立ちあつてきた人の顔なんだろうな。

それでも仕事に夢中になっているふたりの姿を見ていて、思う。

たくさんさんの生と死の先に、なにが見えるんだろううつて。

(注) 母さん…看護師として働いている。

すどうさんがエサをまくと、金魚たちはいつせいに水面に集まってくる。はちきれんばかりにピチピチしたからだで水と仲間をおしのけ、おぼれるように浮き沈みしながら、先を争って食べている。仲間の死のそばで、金魚たちはこうして元気に生きている。きつと、なるようになるんだ。

<sup>(4)</sup>だからおれも、できるだけのことをしよう。最後まで……いや、もし最後の一匹がだめになっても、また何度だって挑戦ちょうせんすればいい。うちに帰ったらさっそく、チビ金魚を広い水槽に移してやろう。まずは病気の金魚がいた水槽をきれいに洗って消毒して、玉砂利じゃりやエアレーション装置もすべて洗って日光にあてて乾かかわして……。やることは、まだまだある。

(河合二湖『金魚たちの放課後』より)

問一 おれはズボンのポケットのなかで手をにぎりしめ、後ずさりした。とありますが、なぜですか。説明しなさい。<sup>(1)</sup>

問二 やっぱりここはいいな。とありますが、なぜこのように感じるのですか。説明しなさい。<sup>(2)</sup>

問三 I にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア しつらえる    イ あやかる    ウ いたわる    エ まっとうする

問四 II にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア きげん    イ 歯ざれ    ウ 手ぎわ    エ 意地

問五 A C にあてはまる最も適切な表現を次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア あ然とした    イ 頭にきた    ウ 途方とほうにくれた    エ ほっとした

問六 すどうさんは言葉を切った。とありますが、なぜですか。説明しなさい。<sup>(3)</sup>

問七 だからおれも、できるだけのことをしよう。とありますが、この時の慎の気持ちを説明しなさい。<sup>(4)</sup>

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

言葉そのものは、実に地味な存在。言葉によってつむぎ出された文学や思想は、人の注目を引きやすく、拍手喝采を浴びることもあります。それに比べて、文学や思想を生み出した言葉そのものが派手派手しく脚光を浴びたりすることはありません。言葉は、<sup>(1)</sup>織物を作り出すための糸に過ぎません。

ところが、最近とくに、素材である日本語が注目を浴びています。なぜでしょうか？ 素材である言葉が激しく変化している時期だからです。古い言葉や表現が急速に忘れられつつあります。日本の伝統的な言葉や表現が次々に失われているのです。それが、日本の年配者の危機感を煽っています。日本語をもっとしっかり教えなくては、という思いが、ナシヨナリズム的な昨今の風潮に後押しされて、前面に出てきている時期なのです。

テレビを見ても、日本語のクイズばかりです。つい最近も、スキー場で楽しむ若者たちにこんな穴埋めことばのクイズが出されていました。

「濡れ手で□」。若者は、「濡れ手で洗濯」などと答えている。濡れた手で洗濯するなという意味ではないかと言う。「濡れ手で食うな」と答えた若者もいる。手を洗っても、濡れたままで食べてはいけないという意味ではないかと当人は答える。「濡れ手で食う」と正解を教えてもらっても、「粟」を「くり」と読んで腑に落ちない顔をしている。

まさに、日本語の危機。そう思えます。こうして、日本語は注目され、今ブームになっているのです。

<sup>(2)</sup>

A、日本語の歴史を知ることには、どういう意味があるのでしょうか？ 日本語の将来は、日本語を話す人々すべての問題です。日本語を生かすも殺すも、日本語を話す人々の考え方にかかっています。敬語をどうするのか？ 「言葉の乱れ」をどう考えるべきなのか？ これからの日本語をどういう方向に変えていくべきなのか？ 日本語を使っている人々一人一人が、考えてみるべき問題です。これらの問題を正しく考えるためには、日本語の盛衰せいすいの歴史を知っていることが必要です。

あなたは、今話している日本語がなくなったらどうなるかという問題を考えてみたことがあるでしょうか？

B、英語

だけで用をたさなくてはいけない状態になったとしたら？ むろん、権力で強要されれば、長い時間をかけて、英語だけを話すようになるでしょう。でも、英語という糸で織り成される文化は、日本語という糸でつむぎ出されていた織物とは全く異なっているのです。たとえば、日本語には擬音語・擬態語が豊かに存在します。けれども、英語にはあまりありません。C、こんなことが起こります。

鳩子さんは、そんな三好さんをジロリと流し見た。

(源氏鶏太『御苦労さん』)

これは、日本語の文です。<sup>(3)</sup>これを英語で言おうとすると、「ジロリ」という擬態語がうまく表現できないのです。藤田孝・秋保慎一編『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』(金星堂)では、この箇所をこう翻訳しています。

Hatoko cast a sharp side-long glance at him.

「鳩子は彼に鋭い横目を向けた」といった意味の英語になっています。これでは「ジロリ」の持っている、眼球を左から右へあるいは右から左へ移動する動きが、失われてしまいます。「ジロリ」は、単に「鋭い横目」という抽象的な言葉では表せないような、

具体的で感覚的な意味を持つ言葉です。つまり、日本語で織り成されていた織物のもっていた独特の風合いがなくなってしまったのです。母国語を失うということは、物の考え方、感じ方を失うということ。大げさに言えば、具体的で感覚的な日本文化が消えているのです。もちろんそれでもいいとおっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが。

そういう方は、是非とも次の問題も考えてみてください。世界中の言語がすべて英語だけに統一されてしまったとします。すると、どの地域からも英語という糸で織り成される織物しか出来てきません。それぞれの地域のもっていた独特の風合いが失われ、どの地域に行っても、どこに住んでも、同じ織物しかないのです。ということは、異なる織物同士の間で競争したり、刺激しあったりすることがないということです。人は、努力をしなくなります。人類の文化そのものが痩せて廃れていきます。<sup>(4)</sup>一元化の恐ろしいところ

人類の文化が発展するのは、さまざまな素材があり、その素材によって織り成される文化が違うからこそなのです。違う文化同士が接触し、互いに刺激しあい、総体として人間の文化が発展する。

日本語という素材を大切にし、いつくしむ心が、結局は人類を豊かにするわけです。国家主義ではありません。それぞれが自らの創意工夫を凝らしてつくりだした文化を大切にしようこそ、人類を救うと私は信じているのです。そして、この認識を持っていれば、他民族に自国の言語を強要したりするようなおろかな真似をしないと信じているのです。

日本語の歴史を知るということは、日本語の将来を考え、日本語によってつむぎ出された文化そのものを大事にし、後世に伝えていく精神を培っていくのに役立ちます。私たち人間は、よって立つところの母国語がなければ、文化をつむぎ出せないのです。



問一 言葉は、織物を作り出すための糸に過ぎません。とはどういうことですか。次の文の空欄くうらんにあてはまる語句を本文中からそれぞれ五字、二字で抜き出して答えなさい。

言葉は、( ) 五字 ( ) を生み出すための ( ) 二字 ( ) に過ぎないということ。

問二 濡れ手で粟あはに近い意味を表す四字熟語を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一石二鳥 イ 一攫千金いっかく ウ 一進一退 エ 一網打尽いちもうだじん

問三 

A
---

く
---

C
---

 にあてはまる語として最も適切なものをそれぞれ次のア～ウの中から選び、記号で答えなさい。

ただし、同じ記号を二度使つてはいけません。

ア すると イ たとえば ウ ところで

問四 これを英語で言おうとすると、「ジロリ」という擬態語がうまく表現できないのです。とありますが、なぜですか。解答欄に合うように答えなさい。

問五 一元化の恐ろしいところです。とありますが、どのようなことが「恐ろしい」のですか。説明しなさい。

三、次の①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 人気作家のコウエンを聞く。
- ② 今回の工事はキボが大きい。
- ③ 勇気をフルって言う。
- ④ 木星にタンサ機を飛ばす。
- ⑤ 作業の計画をケントウする。